

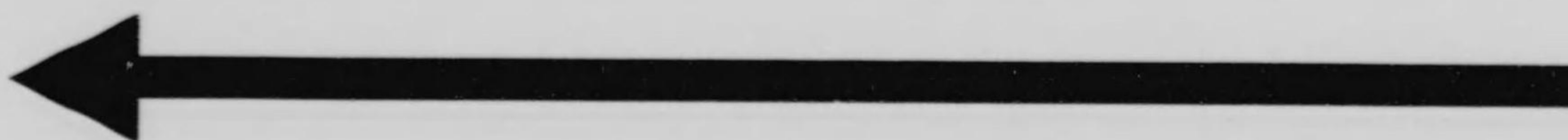
373

97

製鐵業の現在及將來  
附鐵鋼會社の前途



始



要屋株式会社調査部報告第四編

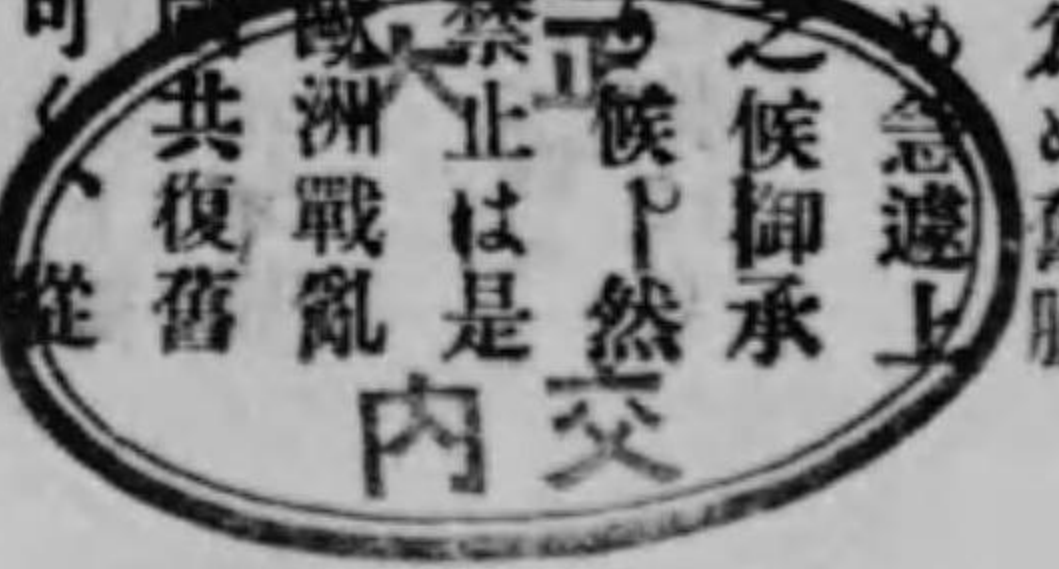
製鐵業の現在及將來

附 鐵鋼會社の前途

373-97

改曆の御慶芽出度申納候

昨年中は重々の御引立を蒙り難有、弊店が開業日淺きに拘らず、日々隆昌に向ひ候は  
 全く貴下の賜に外ならずと感銘此事に御座候。就ては平素の御愛顧に報ひん爲め腐臆  
 來調査部に命じ、鐵鋼業の現在及將來並に重なる鐵鋼各社の前途を調査せしめ急遽上  
 梓の上御座右に備へ候。萬一にも御放資の御参考ともならば弊店の光榮不過之候御承  
 知の通り、戰亂以來各種事業の勃興するもの相亞ぎ、未曾有の股脈を極め居候。然  
 るに是等事業の遂行に必要な鐵鋼類の不足を來し、殊に曩日の米國鐵輸出禁止は是  
 等事業に甚大の打撃を與へ、爲めに鐵類の市價非常に暴騰を來し候。而かも歐洲戰亂  
 は何時終熄すべしとも覺えず、譬へ近く平和克復する共當分兩三年間は、各國共復舊  
 事業に忙はしかるべく候へば、到底満足なる供給を海外に仰ぐ事は困難なる可く、從  
 つて今後は大部分を我が製鐵業者の經營に俟つの外なかるべしと被存候。然る處幸に  
 之が補給として、官營八幡製鐵所を始め各種民營鐵鋼事業の擴張及び勃興を見るに至  
 り、孰れも着々事業を進捗して、近く製品を見んとするものも尠からず候事は、邦家



の爲め此上もなき欣ぶ可き現象に有之候。併し鐵類の自給が、果して如何なる程度迄  
進み得るかは疑問にて、従つて鐵類市價も當分暴落を演ずる様の事は想像されず候へ  
ば、鐵鋼各社の収益は今後兩三期に亘つて意外の多額に達すべく候。去すれば今後は  
等鋼鐵事業に投資するは、最も機宜を得たるものと謂ふ可く、斯くは特に調査の上御  
勸め申上候次第に御座候。本調査は僅々旬日間に調べ上げ候ものに候へば、多少不備  
の點は豫め御了得を願上候。

尙ほ此外石炭、織物、化學工業、其他に就き、順次機を見て調査し其都度御高覽に備へ、  
出來得る丈け御放資の御参考に供すべく候間、此上ながら御愛顧の上、多少に拘はら  
ず御用命の程伏而奉願候。先は年頭の御祝辭に代へ如此御座候。 謹言

大正七年一月元旦

要屋株式会社

長谷部耕太郎

## 目次

過去に於ける銑鐵需要の概況	一
過去に於ける鋼材需要の概況	六
將來に於ける銑鋼需要の推定	二二
我が銑鋼の産出能力如何	二六
民間製鐵所の銑鋼製産狀況	二〇
製鐵業の前途と各社の成績	二七
重なる鐵鋼會社の今期及前途	三三
日本鋼管會社	三三

東京鋼材會社……………三五

日東製鋼會社……………三七

日本製鋼會社……………二八

大島製鋼所……………三九

大阪製鐵會社……………四〇

日本電氣製鐵所……………四一

北海道製鐵會社……………四二

電氣製鋼所……………四三

大阪鑄鋼所……………四四

日本銑鐵會社……………四四

東海鋼業會社……………四五

東洋製鐵會社……………四六

日本鋼鐵會社……………四七

富士製鋼會社……………四八

東京銑鐵會社……………四九

日本鑄鋼所……………五〇

其他の鐵鋼會社……………五〇

目次畢



# 製鐵業の現在及將來

## 附 各鐵鋼會社の前途

### 過去に於ける銑鐵需要の概況

歐洲戰亂の勃發以來、我國の工業界は古今未曾有の殷盛を來したり。従つて之が材料たる、鐵材需要額の激増は實に愕く可きものにして、殆んど吾人の想像以上に在り。元來鐵の消費高は其國工業の進歩と正比例するものにして、鐵の需要大なれば大なる程、其國の文明は進歩しつゝあるを示す。今之を過去の趨勢に見るに、鐵需要額は戰前より戰時及び戰後に於て最も急激なる増加を來すを常とするが如し。單に銑鐵の需要額のみに見ても、明治二十九年當時銑鐵需要額は内地產出高及び移輸入高を同じ合計六萬五千百餘噸に止まりしもの、三十年には七萬五百餘噸、即ち八分強の増

(1)

加を示し、三十一年には八萬五千八百餘噸を計上して、二十九年に比し實に三割二分弱の増加となれり。以て日清戦後如何に需要の増加せるかを見るべし。然るに卅二、三十三年の兩年度に於ては却て二十九年の戦時より需要減退し、内地産移輸出入を合し四萬七千噸臺に下れり。蓋し、戦時及び戦後に於ける事業熱の減退したる結果に外ならず。然るに三十四年に至り俄然需要高を激増し、内地産額五萬六千八百餘噸、移輸入額四萬三千百餘噸、合計九萬九千百餘噸となり、二十九年より三十三年に至る五ヶ年間の平均合計額六萬三千餘噸に比し、實に五割六分強の激増なりとす。懷ふに北清戦役後の好影響を受けて、内地事業著しく勃興したる爲めなりとす。越へて三十五、六の兩年は稍や需要減少したるも、移輸入額は寧ろ増加の趨勢を辿り、大勢健實なる發達の科程を示せり。然るに明治三十七年一度日露戦争勃發するや、軍需用として鐵需要著しく増加し、同年の内地産出高及び移輸入額各六萬四千餘噸を示し、合計十二萬九千七百餘佛噸となり、三十八年に至つては兩者合計二十三萬一千餘噸、即ち戦前の卅六年に比し實に約二十三割九分の大増加を來したり。斯くして戦後に入るや諸事業勃然と

して興り、諸會社の創立せらるゝもの百數十社の多きに達し、從て鐵需要額は絶えず増加の一方にて、四十三年の如きは廿九萬八千餘噸からの需要額を見るに至れり。唯だ此間注目すべきは内地産出の激増したる事にして、一般には我が鉄鐵需要額の大部分は移輸入額に仰ぐと稱すれ共、數字統計の示す處は必ずしも然らず。勿論移輸入額は大體増加の足取りを示したりとは云へ、卅九年より四十三年に至る五ヶ年間平均よりすれば、内地産出高は移輸入高の約五割増加と成り居れり。之れ内地鐵産出高の案外侮る可からざるものあるを證するものにして、爾後今日に至るまで此狀勢に大なる變化なし。而して前記各合計額中製鋼原料として使用せらるゝものあり、反對に移輸出せらるゝものあるが故に、差引鉄鐵としての實際需要額は各年の約半數に過ぎざれど、内地産出額、輸移入額の増加するに連れ需要額の漸次増加したるは事實なり。又た移輸出鉄鐵計數は三十五年頃より計上されあるも、毎年僅々六百噸以内に過ぎずして、製鋼原料として使用せらるゝもの百分の九十四以上に相當し居れば、殆んど移輸出なしと見るも差闕なし。更に進んで明治四十四年以來の需要大勢を觀るに、同年





而して銑鐵輸入最も多きは從來英國にして、大正二年には、一億六千五百七十一萬餘斤、價額四百十六萬四千餘圓に達し、英領印度之に亞ぎ支那更に之に亞ぎしが、大正四年に至り地位を轉倒して支那第一位を占め、一億三千八百十七萬餘斤、價額二百八十八萬九千餘圓となり、英領印度之れに亞ぎ英國第三位となり。斯く英國及び英領印度よりの輸入減退したるは、戰亂勃發の爲め自國の需要に逐はれ、十分の輸出を爲し能はざるに至りたるが爲めに、一方支那之に代るに至りたるは、勿論前記輸入減退の補給を理山とするも、一面近時支那鐵鑛業の發達著しく、而かも、比較的低廉に供給を仰ぎ得るに職由するものにして、此意味に於て我國の製鐵業は今後大部分の基礎を支那に置くものと謂はざるべからず。此外瑞典及び米國よりも相當の輸入あるが、之を支那に比すれば猶ほ遙かに低位にあり。

### 過去に於ける鋼材需要の概況

鐵鑛は之を骸炭、滿俺鐵、石灰石と共に熔鑛爐に投じて銑鐵と爲す事は既に人の知

る處なり。然れ共鐵の需要は銑としてよりは、寧ろ鋼としての需要に於て大部分を占むるものなるが故に銑鐵は製鋼原料として使用せらるゝ分量大なるを常とす。従つて我國に於て銑鐵が漸次鋼材原料としての需要に向つて増加の趨勢を有するは、各種工業中鋼材を使用する事業の益々發達しつゝあるを示すものにして、我事業界前途の爲め欣ぶべき現象と謂はざる可からず。試みに數字に依りて之を見るに、前掲統計表に於て示せる如く明治卅九年に於ける銑鐵需要高は、内地產出高、及び移輸入高を合し廿四萬八千餘噸にして、内製鋼原料として使用する銑鐵高十二萬二千餘噸なれば、合計に對する割合は四割九分に當る。然るに四十四年には合計額廿九萬八千餘噸なるに鋼材原料用高十八萬八千餘噸となりたれば、其割合は六割三分強即ち、一割四分の増加となりたる譯なり。而して更に大正四年に於ては如何といふに、合計額は四十九萬二千餘噸なるに、此内製鋼原料としての使用高は三十三萬八千噸なれば、其割合は六割九分弱に當るを以て、四十三年當時の六割三分に比較すれば更に六分方の増加なり若し夫れ卅九年當時の四割九分當時に比すれば正に二割の増加なりとす。以て如何に

内地の製鋼業が發達せるかを、知るに足る。然らば、是迄鋼材の需要狀況は、如何なる大勢にありしか。前掲の統計表に倣ひ毎五ヶ年間平均を計算するに、明治二十九年に於ては内地産出高千百餘噸、移輸入額二十二萬餘噸、合計二十二萬一千餘噸なりしもの、三十三年には内地産出高九百七十噸に迄減じたるに、移輸入高は却て二十八萬八千餘噸に増加し、合計額二十八萬九千餘噸となり、此五ヶ年間の平均は内地産出千五百噸、移輸入二十三萬三千餘噸、合計三十三萬四千二百餘噸を計上する事となる。而かも、此五ヶ年間は一噸の移輸出も無かりしを以て、該合計額は全部需要されたる譯なり。越て日露戰役勃發當時の三十八年には、内地産出高七萬一千餘噸、移輸入高三十七萬八千餘噸、合計四十四萬九千餘噸を計上し、此内三千九百餘噸の移輸出額を控除したる殘額四十四萬五千二百餘噸を、正味需要額として計上せり。而して今卅四年より卅八年に至る五ヶ年の平均額を見るに、内地産額四萬一千餘噸、移輸入額二十四萬八千餘噸、合計平均二十八萬九千餘噸なるを以て、前五ヶ年間の平均に比し増進割合内地産出高三十八倍六割強、移輸入高六分五厘、平均二割三分四厘に當る事を知る。

故に内地産出高増加割合の方遙に上位にある事明かなれ共、其合計額より觀れば内地の産出高は漸く一割五分強に相當するに過ぎず。況や三十九年以後は内地産額漸次増加の趨勢を辿ると雖も、本邦鋼材需要額の増加激しき爲め其割合に遠ざかる事漸く甚しく、三十九年より四十三年に至る五ヶ年間の平均額は内地産出十萬六千餘噸なるに、移輸入鋼材額は三十七萬九千餘噸に激増し、其割合は内地産出十五割五分に遞減したるに拘らず、移輸入額は五割三分弱に増進し、漸次に内地産出高を據するに至りたるのみならず、四十四年より著しく移輸入額を増加して、大正元年の如きは内地産出高二十一萬九千餘噸なるに、移輸入高約六十四萬一千噸を示し、其合計八十六萬餘噸に對する割合、内地産出二割五分強、移輸入高七割五分弱を示すに至れり。尤も大正三年歐洲戰亂勃發以來英國及び英領印度よりの輸入困難となりたる結果、反つて位置逆轉の趨勢を示し、翌大正四年に至つては、移輸入廿四萬三千餘噸に減退したるに内地産出高は却つて三十三萬五千餘噸に増加し、其合計五十七萬八千餘噸に對して内地産出五割八分弱、移輸入四割二分強に至れり。之と同時に移輸出額も逐年増加し大

正三、四、五年に於ては幾分減少したるも、尙ほ且つ年額二萬噸の輸出を見、前途鋼材輸出に對して大に嚮望し得るに至れり。左に之が統計表を示さん。

▲鋼材需要高調査表 (製鐵業調査會報告)

年次	内地產出高		移輸入高	合計	移輸出高	差引純需要高
	前五年平均ニ比シ増進割合	明治四十四年				
二九年—三三年	一〇五〇	二二三、二三四	二三四、二八四	—	二三四、二八四	
三四年—三八年	四一、五八五	二四八、三八五	二八九、九七〇	三、四九一	二八六、四七九	
前五年平均ニ比シ増進割合	三八六、〇五	〇、六五	二、三四	—	二、二三	
三九年—四三年	一〇六、〇三一	三七九、六五四	四八五、六八五	一三、一九八	四七二、四八七	
前五年平均ニ比シ増進割合	一五、五〇	五、二八	六、七五	二七、八〇	六、四九	
明治四十四年	一九一、七〇〇	四八八、九一一	六八〇、六一一	二五、六六六	六五四、九四五	
大正元年	二一九、七一四	六四〇、九六六	八六〇、六八〇	三七、一二九	六二三、五五一	
大正二年	二五四、九八二	五四三、九一〇	七九八、八九二	三三、二二〇	七六五、六七一	
大正三年	二八二、五一六	四〇八、四六七	六九〇、九八三	二九、六二二	六六一、三六一	
大正四年	三三五、五〇九	二四三、三八二	五七八、八九一	二五、〇〇〇	五五三、八九一	

以上五ヶ年平均	前五年平均ニ比シ増進割合	大正五年
二五六、八八四	一四、二三	四二〇、〇〇〇
四六五、一二七	二、三五	四九四、六三〇
七二二、〇一一	四、八七	九一四、六三〇
三〇、一二七	一一、八三	一九、〇二五
六九一、八八四	四、六五	八三三、二八五

(備考) 右の外大正元年より三年迄に船舶機械、鐵道用車輛機關等として輸入せられたるもの一ヶ年平均所要鋼材を概算すれば合計九二、〇二四噸となる。

尙ほ大正五年度に就きて見るに、内地諸事業の活躍に連れ鋼材の需要一段と激増し就中造船事業に至ては非常の進展を遂げたる結果、鋼材の不足を補給すべく内地各製鐵所の勃興したるもの尠からず。爲めに内地供給額著しく増加したるが、製鐵所(府官營)、釜石鑛山、砂鐵を除く他の製産額は、其筋にも未だ詳細なる統計纏まり居らざるを以て、詳細を知り難きも、少くとも十一萬四千噸には達したる可く、左すれば大正五年の鋼材内地產出高は優に四十二萬噸を下る事なかるべし。假りに四十二萬噸とすれば大正四年の產出額に比し、約八萬五千佛即ち二割五分強の増加なり。以て鋼材需要の狀勢を推すに足るべし。

### 將來に於ける銃鋼需要の推定

歐洲戰亂は果して何れの日にも於て終熄すべきや殆んど豫測する能はず。而かも我國は此間に介在して恰かも戰亂には關せざるが如く、各國が軍需品、食料品、雜貨、諸什器、被服類、各種原料に不足を感じて續々我市場に對し注文を發し來るを幸ひ、全能力を擧げて之が引受に應じ居れるが、今日の狀態にては假令近く戰亂終局を告ぐる事あり共、歐洲交戰諸國は過去四ヶ年に亘つて破壊したる橋梁、船舶、建築物、軍需等の補填に全力を注がざるべからざるべく、底到爰一兩年間は全部の秩序を回復する事困難なるべければ、勢ひ各種需品は本邦市場に向つて蒐り來ると見るの外なく、從つて之等需要を充す爲めの事業は尙ほ當分今日の盛況を持続すべく、事業に依つては今日以上に發展するもの尠からざる可きを信す。左すれば我國に於ける鐵の需要は當分増加する共減退するの懼れなく、殊に歐洲交戰國は戰後自國の補給に忙はしく他を顧みるの遑なければ、隣邦國より十分鐵材の供給を仰ぐ能はざる諸國は、勢ひ他に供給の途を求むるに至るべく、或は本邦市場に向つて却つて鐵材の注文を發するに至

る無きを保すべからず。假りに此事は全然夢想なりとするも、鐵の需要額は益々増加するの一方なれば、本邦の製鐵事業が尙ほ一段の般賑を來すべきは疑を容れず。最近製鐵業調査會の發表したる今後の需要額推定は、頗る興味あるものなれば、左に之が要綱を摘録すべし。

▲銃鋼 明治卅四年より卅八年に至る五ヶ年の平均額を、假りに其中間に當る卅六年の需要額と見做し、卅九年より四十二年迄の平均額を、假りに四十年分の需要額と見做し、又た四十四年より大正二年迄の三ヶ年平均額を、大正二年の需要額と見做し、(大正三年戰亂の影響にて其事情平常と異なるを以て之を除却せり) 五ヶ年間の需要増加額を出し、其上増加率を算出すれば、左の如き計數を得べし。

	需要額	五年間の需要増加	増加額の増率
明治卅六年	五九、九九六	六四、〇一一	三六、二九一
同 四十二年	一一四、〇〇七	一〇〇、三〇二	
大正二年	二二四、三〇九		

故に大正二年より五ヶ年後の今大正七年の需要額を、大正二年の需要額に五ヶ年間

(14)

の需要増加額と、増加額の増加率とを加へたるものに等しと假定して更に算定すれば、今大正七年の需要額は三十六萬九百噸、大正九年の需要額は四十三萬噸、同十二年には五十三萬三千八百餘噸、同十四年には六十一萬七千五百噸、同十七年には七十三萬三千噸となるべし。

▲鋼材 前述したる鋼材需要額に基き、明治卅四年より卅八年に至る五ヶ年間の需要平均額を、其中間の年卅六年の需要額と見做し、卅九年より四十三年迄の平均額を四十一一年の需要額と見做し、又た四十四年より大正二年迄の平均額を大正二年の需要額と見做して計算する時は

明治卅六年	二八六、四七九	一八六、〇〇八	八九、五六一
同 四十一年	四七二、四八七	二七五、五六九	
大正 二年	七四八、〇六六		

而して大正二年より五ヶ年後の今大正七年の需要額を、大正二年の需要高に、五ヶ年間の需要増加額と増加額の増率とを加へたるものに等しと假定して算出すれば、今

大正七年には百一十一萬三千噸、同九年には百二十九萬五千噸、同じく十二年には百五十六萬八千佛噸、同じく十四年には百七十八萬六千噸、同じく十七年には二百一十一萬二千噸となるべし。

右の推算は頗る理論的推定なれども、何等變化なき場合を想像しての需要額なれば、實際とは餘程の懸隔あるものと知らざるべからず。即ち今日我國の現状は、既述したる如く時局の影響を受けて造船事業と謂はず、製機事業と謂はず非常の發達を爲し、別して造船事業にありては愕く可き進歩にして、従つて之が造船鋼材の需要は未曾有の額に達しつゝあり。吾人の調査する處に據れば、現時の我造船能力は現在一ヶ年約七十萬噸と稱せられ居れるが、該造船に對する造船鋼材は船舶噸數の半數と採算すれば大過なしと云へば、本年の造船鋼材の需要は約卅五萬噸に上るべき計算なり。一昨大正五年に於ける造船噸數は約五萬噸餘にして、之に要したる鋼材十三萬一千噸餘を計上したれば、昨大正六年の鋼材需要増加額は尠くとも卅萬噸を示したる勘定となる。去すれば造船鋼材需要増加額のみを計入するも、大正五年の鋼材需要額九十一萬四千

(15)

(16)

六百噸に對して、百二十一萬四千六百噸を計上せざるべからず。然るに製鐵業調査會七が大正年度に於てすら、鋼材需要額を百十一萬三千噸を想定し居れるが如きは、著しく内輪の推定と見て差岡なし。殊に大正七年に入りては英國始め各國よりの造船注文輻輳にて目下非常に繁忙を告げ居れば、一躍百五十萬噸以上の鋼材需要額を計上するに至るやも知るべからず。

### 我が鉄鋼の産出能力如何

我國に於ける製鐵産額は近年來長足の進歩を告げ、就中歐洲大戰以來特に其然るを見る。今鋼材の原料たる銑鐵の産出高に就て見るに、明治四十三年に於ては官營製鐵所、釜石鑛山、輪西製鐵所、其他砂鐵製煉所等を合算し、十八萬八千〇十八噸を計上したるに、漸次増加して大正五年には三十八萬九千六百七十三噸に達せり。即ち僅々七ヶ年間に二倍以上に増加したる事となる。斯くの如きは各種事業の發展と共に需要額著しく遞増したる結果にして、移入高の依然多額を計上したる事も既に表示したる

處の如し。試みに明治四十三年以來の銑鐵産出額を左に示さん。

年	製鐵所	釜石鑛山	輪西製鐵所	其他	合計	増加割合
明治四十三年	一二九、一二二	五三、六三八	—	五、二五八	一八八、〇一八	—
同 四十四年	一四七、六六八	四九、〇八三	—	六、三一六	二〇三、〇六七	〇、八〇
大正 元年	一七七、八八一	五三、一五二	—	六、七二二	二三七、七五五	一、一三
同 二年	一七八、七一四	五三、九九九	—	七、六五〇	二四〇、三六三	一、八〇
同 三年	二二一、六七六	四六、六一二	—	二五、〇六三	三〇〇、二二一	二、五〇
同 四年	二四六、七二五	三三、九七三	—	二七、七六五	三一七、七四八	〇、五六
同 五年	三〇二、〇〇〇	四四、一〇〇	—	二九、九七〇	三八九、六七三	二、二九

(備考) 該表は農商務省に於ける調査なれば、前掲製鐵調査會調査と多少計數に於て異なる處あるべし。勿論一致せる處もあり。

(17)

更に鋼材の産出高を觀るに、銑鐵の産出高よりも遙かに増加の著しきものあり。即ち明治四十三年に於ては官營製鐵所の十六萬二千二十九噸を始め、釜石鑛山、砂鐵製鍊所、其他を合し十六萬七千九百六十七噸なりしもの、大正元年には一躍合計二十一

萬九千七百十四噸に増加し、大正五年に於ては官營製鐵所の二十八萬一千九百七十七噸、釜石鑛山の二萬二千二百九噸、砂鐵製煉所の一千五百七十噸、其他の十一萬四千餘噸、合計約四十二萬噸を計上したり。之を四十二年當時に比すれば、七年間に於て實に二倍五割以上の激増なりとす。参考の爲め左に之を表示せん。

年次	製鐵所	釜石鑛山	砂鐵	其他	合計	増加割合
明治四十三年	一六〇、二二九	六、八二八	九一〇	一六七、九六七	—	—
同 四十四年	一八一、四九三	九、四六九	七三八	一九一、七〇〇	一、四一	—
大正 元年	二〇七、二八〇	一一、三〇五	一一二九	二一九、七一四	一、五一	—
同 二年	二一六、二二二	一三、四七六	四四七	二五四、九五二	一、六〇	—
同 三年	二三〇、九二八	一四、〇四六	一、六五六	二八二、五二六	一、〇九	—
同 四年	二六七、三六一	一六、三一八	一、二九〇	三四二、八七〇	二、八四	—
同 五年	二八一、九七七	二二、二〇九	一、五七〇	約四二〇、〇〇〇	二、二五	—

(備考) 銑鐵の備考と同様なり。  
過去七ヶ年に於ける銑鐵及び鋼材の産出能力は、斯くの如く長足の發達を遂げたる

が、別して昨大正六年に於ける産出能力に於て、其著しきものありしは想像に難からざる處、而かも各既設會社及び製鐵所は競ふて産出能力を増加し、新設會社亦た隨所に勃興して供給に應ずるあれば、大正七年以後に於ける産出供給力に至つては更に大なるものあるべし。然らば如何なる程度に於て供給し得べきやといふに、先づ以て述べざるべからざるは官營の九州八幡製鐵所なるが、同製鐵所は數度の擴張にて製銑製鋼能力等著しく増加し、大正五年度に於ては銑鐵三十萬二千五百八噸、鋼材二十八萬二千噸の産出高を計上したるが、大正六年度に於ては銑鐵三十三萬噸、鋼材四十萬二千八百九十噸を産出する豫定なり。即ち大正五年度に比し銑鐵二萬七千九百四十二噸(九分二厘強)鋼材十二萬八百九十噸(約四割三分)の増加なりしが、右鋼材の四十萬二千餘噸中一萬七千噸は車輪のタイヤ、心棒の如き鍛鋼材にして、プレート等の造船鋼材は少くとも六萬噸には達すべく、又た銑鐵に於ては右の外に目下十萬噸擴張の計畫に着手し居れるが、遅くも大正七年四月當初には製品を出す事を得べしといふ。次に民間製鐵所なるが、戰亂開始以來勃興したる大小製鐵所數既に卅ヶ所(製鐵所十一ヶ所、鋼材所十九ヶ所)に上り

昨大正六年中の銑鐵豫定額は、既設會社を通じ、二十四萬四千餘噸にして、戦前の七、七、七、千、四、百、六、十、八、噸に比し、約三倍以上の激増を來せるが、鋼材製産高に至つては更に甚だしく、民間既設製鋼所を通じ、三十七萬五千五百餘噸にして、之を大正三年當時の、僅々五萬三千八百七十一噸なりしに比すれば、實に七倍二割弱の大激増なりとす。(大正六年以後は推定額なり)

銑鐵產額		鋼材產額	
官營	民間	官營	民間
計	計	計	計
二二一、六七六	二九八、一四四	二六〇、〇〇〇	二九八、七二〇
三〇二、〇五八	四三二、九〇八	二八二、〇〇〇	四一三、一七〇
三三〇、〇〇〇	五七四、七三二	四〇二、八九〇	三七四、四六九
四〇〇、〇〇〇	八八六、九九八	五八九、九〇〇	三七六、九〇〇
四〇〇、〇〇〇	一、二五二、五七〇	五〇〇、〇〇〇	一、五一八、〇二〇

民間製鐵所の鉄鋼製産狀況

民間製鐵所の擴張及び新設には最も注意すべき事項なるが、既設製鋼所の擴張せし

れたるもの、内特に注目すべきは川崎造船所及び三菱長崎造船所の船材料製造と、日本鋼管會社の鋼塊鋼管の大増産となるが、三菱長崎造船所は朝鮮兼二浦に於ける三菱製鐵會社の製鋼と相俟つて船材の自給を圖るべく、川崎造船所は大正六年に從來の鋼製品以外大正六年より、新たに自給策として年額六萬噸の鋼材を製出すべく、日本鋼管は從來の規模を約六倍の能力に擴大すべく目下着々進捗中なり。又た日本製鋼所は從來の鋼塊以外更に鋼鍛造物の製作を開始し、既に三萬噸以上の製品を出せり。次に製鋼所中新設せられたるもの、内住友鑄鋼所は既に一萬以上の鑄鋼品を出し、滿鐵經營の鞍山製鐵所は既に約八萬噸の銑鐵を産したるが、八年度より十五萬佛噸以上の鋼材を出す筈なり。次に日本電氣製鋼所は大正七年に於て、一萬五千噸の銑鐵を製し翌八年に於て銑鐵、鋼材共に七萬噸を出す計畫を立て、安川九州製鋼所は大正八年に鋼材五萬噸を出すの豫定なり。又た兼て計畫中なりし三菱兼二浦製鐵所は、資本金三千萬圓の三菱製鐵會社と組織を變更したるが、同社は其所有に係る兼二浦、銀山、載寧面、普林面等の鑛山より鐵鑛自給の計畫にて、目下百五十萬圓を投じて鐵鑛運搬の



鐵道建設中なり。製産能力は大正七年に銑鐵六萬噸を出し、翌八年に於て銑鐵八萬噸鋼材五萬噸を計上する筈なりといふ。次に北海道製鐵會社は三井一派の經營なるが、之は北海道炭礦汽船經營の輪西製鐵所を株式組織に改めたるものにして、大正六年に於ては六萬八千噸の銑鐵を産したり。漸次十萬噸まで能力を殖す筈なるが、同時に製鋼設備も附設するといふ。其他釜石鐵山會社、本溪湖煤鐵公司の擴張、東洋製鐵會社（資本金三千萬圓）の新設等大規模のもの尠からず。今大正六年十月一日現在既設新設製鐵所及び其能力を示せば左の如し。

製鐵所名	大正五年	同 六年	同 七年	同 八年	完成後
官營八幡製鐵所(既設)	三〇二、〇〇八	三三〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇
釜石鐵山會社(同)	二八二、〇〇〇	四〇二、八九〇	四〇二、八九〇	四〇二、八九〇	四〇〇、〇〇〇
北海道製鐵會社(同)	四三、三一七	一〇〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
備前製鐵會社(同)	二五、三六四	三〇〇、六〇〇	三三〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇
	二九、六〇四	六八、〇〇〇	七一、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
	三、七九六	不	不	不	不
		三、五〇〇	三、五〇〇	三、七〇〇	三、七〇〇

製鐵所名	大正五年	同 六年	同 七年	同 八年	完成後
栗水鐵山會社(既設)	二、八五八	三、〇九八	三、〇九八	三、八〇〇	三、八〇〇
本溪湖煤鐵公司(同)	四九、三一一	不	六〇、〇〇〇	九〇、〇〇〇	九〇、〇〇〇
日本製鋼所(同)		四九、三〇〇	不	不	不
住友製鋼所(同)	二、四〇〇	一〇七、二〇〇	一一五、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇
三菱長崎造船所(同)		一〇、五三二	二五、〇〇〇	五〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
神戶製鋼所(同)	一一、〇〇〇	七〇七	一〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇
安田製鋼所(新設)		一五、〇〇〇	不	不	不
富士製鋼會社(同)		不	不	不	不
鐵道院大宮工場(既設)	八〇〇	一、六三〇	二、〇〇〇	三五、〇〇〇	三五、〇〇〇
川崎造船所(同)		六〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇
日本鋼管會社(同)	五五、〇〇〇	七三、五〇〇	一〇〇、〇〇〇	一二三、〇〇〇	一五〇、〇〇〇



(26)

岩本製鐵所(新設)	鋼鉄	二〇,〇〇〇	二五,〇〇〇	三五,〇〇〇	三五,〇〇〇
伊藤鋼鐵研究所(同)	鋼鉄	不明	五,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
高田商會電陽社(同)	鋼鉄	不明	不明	不明	不明
日本製鋼會社(既設)	鋼鉄	不明	不明	不明	不明
東京鋼材會社(同)	鋼鉄	二,五〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇
浦賀船渠會社(同)	鋼鉄	一,一〇〇〇	一三,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇
安川九州製鋼所(新設)	鋼鉄	不明	不明	不明	不明
淺野製鋼所(同)	鋼鉄	不明	不明	五〇,〇〇〇	不明
東海鋼業會社(同)	鋼鉄	五,〇〇〇	一〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	三五,〇〇〇
王子電氣製鐵所(同)	鋼鉄	不明	不明	不明	不明
土橋電氣製鋼所(同)	鋼鉄	不明	不明	不明	不明

日本特種鋼會社(同)	鋼鉄	一,五〇〇	一,五〇〇	二,〇〇〇	不明
大阪製鋼會社(同)	鋼鉄	不明	七,〇〇〇	不明	不明
大日本人造肥料(既設)	鋼鉄	不明	七,〇〇〇	七,〇〇〇	七,〇〇〇
合計	鋼鉄	四七,六六六	(五七,三三三)	(八六,九九九)	(一,二三,五七五)
	鋼鉄	四三,二七〇	(七四,四九九)	(九三,七九〇)	(一,五八,〇〇〇)
	鋼鉄				(一,三五,二二〇)
	鋼鉄				(一,五五,七三〇)

(備考) 右は昨六年中に設立せられしものに限る。外に吳製鋼所あれ共不明なり。( )内は推定額とす

### 製鐵業の前途と各社の成績

前述したる我が今後の銑鋼需要數及び産出能力數は、全然推定數を示したるに過ぎざれば、其實際に當りては尠からざる異動あるものと見ざるべからず。殊に十二月の需要増加率の程度よりすれば、既記の如く鋼鐵百萬噸、鋼材百五十萬噸を下る事なかるべきを以て、假りに此數字を以て大なる軒輕なきものとすれば、前表の如く内地産出能力は大正七年度に於て、銑鐵百十八萬六千餘噸、鋼材九十九萬二千餘噸の豫定なるが故に、差引銑鐵十一萬四千餘噸、鋼材五十萬八千餘噸の不足を生ずるものと謂は

(27)

ざるべからず。然るに前表各製鐵所の産出豫定額なるものは、實際操業着手後に於て種々の故障を生じ、豫期の能率を發揮し能はざるを常とするを以て、銑鋼共尠く共三割は内輪に見るを要す。左すれば大正七年には銑鐵産出能力七十萬九千噸、鋼材産出能力七十九萬四千噸内外を出でざるべし。一方需要額は前述の如く、大正七年に於て銑鐵百萬噸、鋼材百五十萬噸内外に達すべければ、差引銑鐵に於て二十九萬一千噸、鋼材に於て七十萬六千噸内外の不足は免かれざる事瞭かなり。從來ならば之が不足額は英、米及び印度市場より供給を仰ぎ得られんも、英國其殖民地英領印度と共に輸出禁止の状態にあり、米國亦た過般の鐵材輸出禁止に依りて、殆んど之等の方面よりは供給を仰ぐの途杜絶したれば、我が今後の銑、鋼の補給は到底不可能となれるものと謂ふの外なし。尤も既記の如く支那市場よりの輸入激増する事となりたれば今後は勿論此方面に手を盡す事となるべけれど、支那よりの鐵輸入は其實我國各製鐵所の特約又は經營に係るもの尠からずして、前掲各社の産出能力表中には、當然之等の特約鐵鑛及び經營の分を含み居れば、斯かく統計の示すが如き實際の輸入あるものにあらず

從て之が今後の補給は。大部分我が製鐵業の經營に俟たざる可からざるに至るべし。加之も戰亂終熄後に於ても、既述したる如く、到底兩三年間交戰國より満足なる供給を仰ぐ事困難なるべければ、終に我國は今後鐵材の自給國として立つ事となるべし。這識者の夙に認むる處にして、當業者も亦た既に覺悟せる處なり。鐵類の自給が果して如何なる程度に迄進み得るか未だ測斷する能はざるも、我國に於ける鐵鑛の貧弱なる點より鑑み、到底充分なる自給を豫期する事は困難なるべく、尤も關東洲、及び朝鮮に於ける鐵山採掘大に有望視せられつゝあれば、必ずしも悲觀するの要なからんも、而かも充分自給能力を發揮する迄の苦痛は兩三年間忍ばざるべからざるべし。嗣つて鐵材價格を見るに、戰亂勃發以來鐵材の不足にて唯さへ騰貴したる鐵價は、彼の米國の鐵禁輸以來一段と緊張の度を昂め、大正六年八月當時の如きは戰前相場の七倍乃至十倍の大暴騰を示すに至れり。尤も最近に至り内地自給鐵漸次増加したる結果、稍や低落を示し來れりと雖も、猶ほ大正三年七月、即ち戰前相場に比較すれば、五倍乃至七倍の高値にありとす。試みに最も需要多き丸棒及び鐵板に就き、市價の變遷を表示

すれば左の如し。

年	月	九(六分)	角(五分)	平(二分)	六分	五物(七枚)	四物(三分)	二號鉄	鐵管鉄
大正三年七月		三、〇〇	二、九〇	二、四〇	五、五〇	四、五〇	四五、〇〇	一〇、〇〇	五、〇〇
大正五年一月		六、五〇	五、〇〇	五、八〇	一〇、〇〇	九、八〇	九七、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇
大正六年一月		七、四〇	八、〇〇	八、〇〇	一七、〇〇	一二、五〇	二〇〇、〇〇	一八〇、〇〇	一八〇、〇〇
同	年二月	八、五〇	九、七〇	七、八〇	二一、〇〇	一三、二〇	二四八、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年三月	八、七〇	九、七〇	一〇、〇〇	二〇、〇〇	一三、七〇	二六〇、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年四月	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一七、〇〇	二六、〇〇	一六、〇〇	二六〇、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年五月	一〇、八〇	一〇、〇〇	一七、五〇	二六、〇〇	一七、〇〇	二九一、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年六月	一〇、七〇	一〇、〇〇	二二、一〇	二六、五〇	二〇、〇〇	三一八、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年七月	一五、〇〇	二〇、〇〇	二二、一〇	二四、〇〇	二六、〇〇	三四五、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年八月	一五、〇〇	二〇、〇〇	二二、一〇	三一、〇〇	二六、〇〇	三四四、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年九月	一九、八〇	二二、〇〇	二四、〇〇	三〇、〇〇	三一、〇〇	三四四、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年十月	二一、〇〇	一九、五〇	二〇、一〇	二七、〇〇	三一、〇〇	三二〇、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年十一月	一九、〇〇	一八、〇〇	一七、二〇	二四、二〇	二八、〇〇	三二〇、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇
同	年十二月	二〇、〇〇	一八、〇〇	一七、〇〇	二四、〇〇	二八、〇〇	三四〇、〇〇	二〇〇、〇〇	一九八、〇〇

(備考) 右は平均値段を表はしたるものなり。

實に前表の如く戦前に比し隔世の感ありと謂ふべし。去れば今後現状の鈍状を繼續して多少低落する共、戦前相場に復する事は、或は當分絶望なるやも知るべからず。況や品不足絶えずして、多少特殊の物を得んとすれば法外の値を呼ぶ杯、未だ鐵價の將來は悲觀するの要なきが如し。而して更に進んで各製鐵會社の成績に見るに、日本鋼管會社の三割配當を始め孰れも二割以上の配當を爲さざる無し、左に重なる製鋼會社の前、今期成績及び來期豫測を示さん。

製鐵會社	前 期		今 期		來 期	
	拂込	利益配當	拂込	利益配當	拂込	利益配當
日本鋼管會社	三、八〇〇	一、一九二	三、八〇〇	三、八四一	三、〇〇〇	三、〇〇〇
東海鋼業會社	一、二〇〇	九	一、六五〇	五〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
電氣製鐵所	一、二五〇	一七〇、五〇	未詳	未詳	未詳	未詳
東洋製鐵會社	一	一七〇、五〇	未詳	未詳	未詳	未詳
北海道製鐵會社	三、〇〇〇	三三七	三、〇〇〇	三五〇	三、〇〇〇	四〇〇
東京鋼材會社	一、〇〇〇	二五三	一、〇〇〇	六〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
大島製鋼所	一	二五三	一、〇〇〇	一六〇	一、〇〇〇	三〇〇
日東製鋼會社	四〇〇	三五	一、〇〇〇	一四〇	二、〇〇〇	三〇〇

日本銑鐵會社	—	—	—	三七五	—	—	三七五	一四七二、〇〇〇
日本鋼鐵會社	—	—	—	二五〇	—	—	二五〇	一〇〇二、〇〇〇
神戸製鋼所	三、二〇〇	一、五三五	五、〇〇〇	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳

(備考) 今期及び來期は豫想なり。

以上重なる各社の成績に見るも、僅々兩三期間に著しき成績を挙げつゝあるを知る。併し來期及び來期以後に於て、之れ以上の成績を擧ぐるや否やは不明なるも、尠く共兩三期間之れ以下の成績に低下する事ありとは想像されず。況や前述の如く各社の産出能力は大正七年以後著しく増加すべければ、各鐵類價格にして激落せざる限り、寧ろ増加すべき理由あるに於ておや。之を要すに我國の製鐵事業界は戰時事業中、最も般盛を極めつゝあるものにして、世人の注目しつゝある處なるが、從つて株價の如き、未だ何等利益を擧げず配當も計上せられざるに、早くも一割乃至二割の高値を以て賣買せられ、既設會社にして一度び増資を發表するや、拂込價格の三割乃至倍額以上のプレミアムを以て取引せられ、又た日本鋼管株の如き取引市場の建株として賣買せらるゝ株にありては、他社株の一割以上の利廻りにあらざれば進んで取引せられざるに拘ら

ず、殆んど主力株同様、僅々六七分内外の利廻りに於て欣んで取引せらるゝの狀態にあり。之れ事業の性質が、戰後に於て十分有利と認めらるゝが爲めにして、大に故ありと謂はざるべからず。今後に於ても製鐵事業の般賑と共に、製鐵製鋼會社の成績は尙ほ向上進歩すべければ、世の有資家は今日に於て、之等鐵業會社の株に放資するは最も時機を得たるものなるべし。

### 重なる鐵鋼會社の今期及前途

前に述べたるが如く、各社孰れも非常の好成績を擧げ、比較的最近に於て開業したるものに在りても、着々事業の進捗を見、第二期又は第三期決算に於て、一割乃至二割四、五分の配當を見んとする好勢に在るが、今本邦の製鐵事業が、如何に有利の立場にあるかを示さんが爲め、左に重なる各鐵鋼會社十七社を撰び、其の現状及び前途を概説する處あるべし。

▲日本鋼管會社 同社は現在資本金五百萬圓全額拂込済なるが、去る上半期は二百十

九萬八千餘圓の利益を計上し、年三割の配當を爲せり。同社は主として鋼管、條型鋼の製作を爲し居れるが、前期來内地鐵材不足のため、各工場の製産能力を擴張すると共に六年十月より第五製鋼爐(二十五噸)一臺を竣工し、更に十一月より第六製鋼爐(二十五噸)を完成し、共に操業を開始して相當の成績を挙げたる結果、今下半年は三百八十四萬餘圓の利益を計上したり。之を前期に比すれば百六十四萬二千餘圓、即ち七割九分強の激増にして、其利益割合は平均拂込資本三百四十萬圓に對し、實に二十二割六分に當る。左れば配當も當初四割を豫期されしに二割増しの五割を斷行したり。實に愕く可き成績と謂はざるべからず。十二月十三日此増配發表に依りて、定期一躍十二圓以上の沸騰を演じたるは寧ろ當然とす。同社は豫て計畫中なりし製鐵工場第一期工事は、十一月末竣工したるが、十二月中旬よりは愈々作業を開始すべく、此製鐵工場は同社の専務(鋼材料)一ヶ年二萬噸を製出するものなれば、製鋼費低廉にて濟むべく、且つ第七、八、九の三製鋼爐(各廿五噸)の増設ありて、近く作業を開始すべければ、其曉に於ける同社の

鋼塊産出高は、現在より約三千噸増加の一ヶ月九千噸を計上するに至るべし。左すれば來る上半期に於ける總生産高は、尠く共四、五割方の増加となり、従つて利益計上も五百萬圓を下る事なかるべし。右に就き同社は現在資本五百萬圓を、三倍の千五百萬圓に増資する事に決したるが、之が爲め總拂込金は七百五十萬圓となるべけれど、前述の如く利益激増するを以て、本年上半期は或は六割配當を斷行し得るやも知れず。同社は一時魔株と稱せられし程大暴騰を演せしが、目下諸株下押しの影響にて幾分伸力鈍けれど、實質以上の如く堅實にして、現に實株にて二百五十圓臺に手堅く保合ひ居れば、前途増資増配と共に、更に一段の躍進を見るは疑ひを容れず。

▲東京鋼材會社 同社の六年上半期は利益額十八萬七千四百餘圓を計上したるが、而かも這是四月末設立(六年四月東京スプリング製作所と東京鋼材製作所と合併せり)後、六月末に至る二ヶ月間の成績なれば一期間には正に六十四、五萬圓の収益を見たる勘定なり。斯くて拂込資本百萬圓の利益割合五割六分に對し、二割の配當を爲したるが、同社の現在能力は坩堝鋼一ヶ月二十噸、スプリング一ヶ月二百五十噸、マルタン鋼一ヶ月千二百噸(日産額四十噸)にして、六

年上期に比し平均三割以上の増加能力に當る。而して一方原料はビレット四千噸を、噸當り百六十圓見當といふ安値に買入れを爲したれば、此利益は時價一噸二百七十圓搦みより打算し、四十四萬圓内外の差益を得たる譯なり。尙ほ同社は曩にロール一基、ハンマー一基、ホップ機械及びスロリツプのロール機械等を米國に注文したるが、之は來る二月末には到着の豫定にて、此外十五噸の溶鑛爐二基(二臺にて一ヶ年十噸の能力)増設の筈にて、之は坩堝三、四臺の増設と共に、資金約百萬圓を要するより(内借入金の内返済も含む)過般現在資本百萬圓を三倍の三百萬圓に増資を決定したり。今期成績は前述の大擴張にて鋼材五千噸以上を製産すべき豫定なりし處、曩日の風水害にて四千噸内外に減じたるが、併し製品價格は平均一噸四百四、五十圓に販賣され、噸當り百三、四十圓平均の利益を得たる結果、鋼材のみにて約六十萬圓の利益を計上し、其他を合して八十萬圓内外を得たるが如し。即ち全額拂込にて十六割以上の利益割合に當る筈なり。左すれば下期配當は倍額の四割を斷行するに至るべし。同社の株は未だ建株とはなり居らざるも、現物百十四、五圓の中値を唱へ居れば、新株が建株として上場さるゝに至らば、一

躍百五、六十圓臺に突破すべく、之にても猶ほ四割配當として一割三分強の利廻りなれば、前途の躍進は到底免かれざるべし。

▲日東製鋼會社 同社は上半期三萬五千五百餘圓の利益を計上し、年一割五分の配當を爲したるが、今下半年期に入りては川崎に新工場を完成し、昨年七月十五日より三噸ハンマー一基の操業を開始し、且つ過般米國より到着したる六噸ハンマーも、十二月上旬より操業に着手したり。斯く工場機械の増設にて能力非常に増加し、鍛鋼品の如き殆んど倍加し、又た製品價格は米鐵禁輸以來高値に賣捌かれ、一方原料の買付は、幸ひにして割安に手に入る、事を得たる結果、今下半年期(十一月未決算)は前期利益の約四倍の利益を擧げ、十四萬六百餘圓を計上したり。然れ共過般の風水害にて損害額三萬五千餘圓を計上したるを以て、之を差引けば十萬四千五百餘圓の利益となる。それにも猶ほ前期利益の約三倍なり。而して配當は今期五分増しの年二割配當を爲せるが、若し前述の風水害無かりせば、優に年三割の配當は容易なりしなるべし、同社は來る上半期より鋳力製造を開始すべく、之が原料たる、鋼鐵精練に要する二十五噸溶鑛爐四基を設



置する計畫なるが、之に要する資金は機械、敷地工場、建物建設費及び運搬費及び溶鑪爐増設費等、累計約四百萬圓都合なり。之に對しては既に資本金五百萬圓に増資(前資本百萬圓)を決したれば、來る上半期は拂込資本を増加すべきも、前述鉦力製造益の新たに加はると、鍛鋼品の増産にて、優に三十四、五萬圓の利益を計上し、三割配當斷行するに至るべし。同社株は現物として百圓搦みを唱へ居れるが、來期の成績より豫測すれば一割の利廻りは割安と謂ふべし。殊に米國鉦力の禁輸されたる以上、本邦の鉦力は、同社の獨占事業たるに至るべければ、同社株の前途は、大に刮目を値するものあるべしと信ず。

▲日本製鋼會社 同社は主として兵器及び鋼材の製作を爲し居れるが、去る半期は百貳十四萬九千餘圓の利益金を舉げ、拂込資本百五十萬圓に對し十七割の利益年率を計上したり。配當は固定資本の消却を多額に控除したる爲め、僅々一割をなしたるに過ぎざれど、之が爲め同社の内容は寧ろ堅實の度を加へたるものなれば、戦後市價多少の低落を示すとも、毫も困難を感ぜざる事明かなり。而して今期成績は事業の上には

目立ちたる擴張はなかりしも、漸次能率を増加するに努めたる結果、百六、七十萬圓見當利益を見たるが如し。而して一方拂込の増加もあれば、その利益割合は前期と大差なかるべきも、配當は既に去る上半期に於て極度に切り詰め、多額の固定資産消却を爲したる揚句なれば、今下半期は前期の配當に比し、一割乃至一割五分増しの年二割乃至二割五分に決すべし。同社株は建株にあらざるも、現物として百圓臺を唱へ居り、百五十圓臺に昂騰する事も遠きにあらざるが如し。

▲大島製鋼所 同社は六年九月東京製鋼會社の附屬工場より分離して、資本金六百萬圓(内拂込資本百五十萬圓)を以て創立したるものなるが、前記製鋼會社の附屬時代百五十萬圓の資本を投じたるに對し、去る上半期に於て十八萬餘圓の利益(年二割四分の利益割合)を舉げたる程なれば、今下半期相當の利益を舉げたる可きは想像に難からず。同製鋼所は主として造船用シャフト、鐵鋼其他の造船材料、及び鑛山機械を製作し居れるが、設備としては十噸の製鋼爐二基、六百噸の水壓機一基、蒸汽槌及び蒸氣汽罐三基、起重機七個、其他諸機械共六十二臺ありて、毎月各種鋼品三百噸を製産しつつあり。而して同社の

決算は十月及び三月の兩期なるが、今期(三月末決算)三十三萬七千圓の利益は計上すべし。假りに卅四萬圓と見れば、平均拂込資本二百二十五萬圓(今期半ばに第二回百五十萬圓を徴する旨)に對し、三割強の利益割合なり。年一割五分の配當は容易なるべし。而して來期は如何といふに、目下八百噸及び二千噸の水壓機各一基(内八百噸の分は自工場に於て製作据付中)二十五噸爐水管式汽罐三基の準備中にて、此等の機械が運轉するに至らば、來期(四月より九月末に至る)よりは一段の利益を擧げ三、四割の配當を見る遠きにあらざるべし。同社株は現物として殆んど固定し居るも目下十二圓半拂込にて、廿六圓五十錢を唱へ居る程なれば、前途の活躍は期して待つ可きものあらん。

▲大阪製鐵會社 同社は大正五年末資本金百萬圓を以て設立し、更に六年七月五百萬圓に増資したる會社にて、今や拂込資本二百萬圓に達し居れり。前期は營業開始の初期とて、鋼塊二千七百四十噸、丸角平の條鋼二千四百四十噸の製出するに過ぎざりしが、夫れにても尙ほ三十萬圓の利益(百萬圓の拂込資本に對して六割の利益割合)を擧げ、年一割一分の配當を行ひたり。而して今期に入りては、條鋼製産高非常に増加せし一方、例の鐵材暴騰にて五十

四、五萬圓の利益を計上(新株のプレミアム益を除く)したるが如し。去れば今期配當は前期の五分増しの年二割を行ひ、努て社礎の鞏固を圖る由。同社は尙ほ増資金を以て鋼板製造工場を建設する計畫を樹て目下準備中なるが、今年夏よりは製品を見る事を得べし。

▲日本電氣製鐵所 同社(資本金百萬圓)は主として炭素鋼の製作をなし居れるが、王子の同工場は前期來炭素鋼精鍊能力一ヶ月六十噸内外に増加したる上、右精鍊鋼を原料とせる製品工場の製品能力が、今期に入り著しく擴張したると、深川なる製鋼所(能力一ヶ月卅噸)を買収したるとにて、總製産額前期に比し約一ヶ月五十噸の増加を見たり。殊に製品市價は、鐵價の暴騰にて品に依り三、四割乃至七、八割高値に賣却され居れば、今期利益は前期の一萬四千餘圓に比し約四萬圓を計上すべし。併し過般の風水害にて製品、機械及び建物の損害約七、八千圓ありたれば、結局の利益額は三萬一千圓内外なるべきか。而して配當は、去る八月末拂込みたる七萬五千圓(一株七圓五十錢)あり、且つ相當固定資産の消却を計上すべければ、前期の一割二分より八分増の二割見當となるべく模様なり。同社株は現物として相當買物輻輳し、今や卅圓以上を唱へ居れり。

▲北海道製鐵會社 同社は大正六年一月末日迄、北海道炭礦汽船會社の經營に屬せし輪西製鐵所を分離し、該設備一切を百五十萬圓に見積りて株式に振替へ、二月當初資本金三百萬圓を以て成立したるものにて、殆んど三井一家の經營と稱すべきものなるが、去る六月末第一期決算に於ては三十三萬七千餘圓の利益を計上し、二割八分の配當を行ひたり。而して從來五十噸熔鑛爐一基にて、約九千噸の銑鐵を精煉せしに、同社の手に移つて以來、極力設備の完成に努め、且つ別に百噸熔鑛爐一基の据付を爲し、去る六月より入火して操業を開始したる爲め、昨今一日合計百五十噸内外の製産を爲しつゝあり。従つて今期利益は四十萬圓を下る事なかるべきか、左すれば起業費の消却を爲したる上、年三割配當と見て差間なかるべし。尙ほ同社は更らに百噸の熔鑛爐増設中にて、大正七年二、三月頃迄には全部竣成すべく、該擴張費は百二十萬圓内外なれば、近く全額拂込濟となるべし。原鑛は北海道虻田鐵鑛に依り居れども、採掘能力不充分なる爲め、目下支那大冶鐵鑛、朝鮮咸鏡南道利原鐵鑛の鑛石を買收し居れり。兎に角前途有望の會社にて、前記百噸の熔鑛爐が操業著手せらるゝに至らば、年額八

萬噸の銑鐵生産を見る事困難ならざるべし。

▲電氣製鋼所 名古屋に工場を有する同製鋼所(資本金百萬圓)は、創立未だ日淺きに拘らず、今期に入り既に試験的製産時期を脱し、豫定の第一期計畫も完成を告げたる爲め、製品數量著しく増加するに至りたるが、同社製品の珪素鐵及びクロム鐵は、例の米鐵禁輸の好影響等にて價格暴騰し、今期は豫期以上の収益を收めたるものゝ如し。營業成績の内容は未だ詳かにする能はざれども、拂込資本二十五萬圓(資本金五)に對して五割以上の利益割合は確實なれば、十三萬の利益は見たるなるべし。而して利益處分としては、該利益額の三分の一を固定資本消却に充て、殘部を純益として計上するとの事なれば、今期配當は前期一割に比し年三割を計上するに至るべし。尙ほ同社第一期計畫に屬する作業力は、目下全能力を發揮し居れるが、豫て擴張中なる第二期計畫も來る七年一月末には完成すべければ、來期は少く共二十萬圓以上の利益を擧げ得べしと豫期せらる。同社株は現物として頗る買氣ありて、目下二十二、三圓を唱へ居れるが三割配當發表さるゝに至らば三十圓以上には昂進すべし。

▲大阪鑄鋼所 同社は一般に注目せられざる丈け株の賣買も少けれど、其成績は實に驚異の外なし。同社は僅々七萬五千圓の資本金を以て組織したる株式合資會社なれど、今期は非常の利益を博したる爲め、五十六割五分(前期五十五割)といふ大配當を爲したり。之が爲め大に事業を擴張するに決し、資本金を一躍百十五萬圓増加の百二十二萬五千圓となす事に決し、今回の新株を舊一株に新四株を割當て、前記配當金を以て、未拂込金並に新株第一回拂込みに充當し、該株を社員並に従業員、其他會社特別取引の希望に應じて振り當て、一般には公募せざる事となれり。而して第一回拂込は、來る一月十五日限り徴收する事となれるが、擴張の上は假令拂込額増加するとも、年四割を下る事なき見込なりといふ。實に愕く可き成績ならずや。

▲日本鉄礦會社 同社は過般資本金一千萬圓、内拂込卅七萬五千圓を以て創立したるものなるが、目的は主として銑鐵を作るに在りて、二十噸爐一基を据付け、一ヶ年六千噸の銑鐵を産出する筈なり。同社は明年上半期には一千五百噸内外の銑鐵を出し得べしと云へば、之れを時價に見積り二十萬圓見當の收入を見る事容易なるべきか。左

すれば鐵礦、石炭、電力其他の經費を差引くも八、九萬圓の利益を擧げ、年一割乃至一割五分の配當を計上すべきか。同社は漸く此程操業準備に着手したるに過ぎざれど、原礦は朝鮮理源の鑛石買鑛契約既に成立し、猶ほ九州に於ても買鑛する筈なりといへば、全能力を發揮するに至らば三割以上の配當容易なるべし。

(45)

▲東海鋼業會社 同社は大正五年十月資本金三百萬圓、内拂込七十五萬圓を以て神奈川縣下に創立したるものなるが、六年一月福岡縣若松なる宇島に一萬二千坪の敷地をトし。工場を設備し、過船震動起量機、三重式ロール機其他所要の機械を、注文先東京石川島造船所及び芝浦製作所より受取り、略ぼ竣成を告げ目下試験的に製作しつゝ、あれば、遅くも二月には、製品の一部を市場に提供し得るに至るべし。而して同社の製品は中小形鋼材(造船材料の鐵板)なるが、之が原料は特に政府に請願して、若松製鐵所より毎月三萬噸宛の鋼片を、向十ヶ年間拂下を受くるの認可を受けたれば、竣成操業の上は年額二萬六千噸の製産は困難ならざるべし。併し眞に同社が第一期計畫の能力を發揮するは、七年一月以降よりなるを以て、利益を計上するも今年上半期よりなるべし。

(87) しか。然るに同此株は現物として盛んに市場に賣買され、相場も七十圓處を保合ひ居る程なれば、愈々製品を出すに至らば、當初より三割以上の配當を爲す事容易なる可く觀せらる。

▲東洋製鐵會社 同社は澁澤男爵、和田豊治、中野武營、郷、中島兩男爵、麻生太吉、倉知鐵吉氏等一流の實業家に依つて創立せられたる會社にして、資本金三千萬圓内拂込七百五十萬圓といふ、時局以來の最大新設會社なり。従つて其規模の大なる、恰も民營八幡製鐵所の出現を見たるに均しく、其方式も大體八幡製鐵所式に則り、熱料炭も筑豊炭を基礎とし、別に滿鐵會社と交渉の上開平炭、本溪湖炭を使用する筈なるが同社の製産能力は一ヶ年に銑鐵十七萬噸にして、此内八萬五千噸を當分銑鐵の儘販賣し、殘額八萬五千噸を原料として年額十萬噸の鋼塊を製造し、更に之を使用して七萬五千噸の鋼材(内條鋼及び形鋼四萬五千噸、鋼板三萬噸)を製出する豫定なり。而して該原料鐵石は中日實業公司と交渉の上、中日實業側の權利に屬する支那安徽省繁昌縣桃中鐵山の鐵鑛を使用し之に朝鮮其他の鐵鑛を混用する筈で、其製出せんとする鋼鐵は、目下最も需要多き大

き六吋以内の各種鋼材、厚さ二分の一吋以下の鋼板を主とするものゝ如し。而して第一熔鑛爐は、既に米國の某會社より買收する事となり、同社の加藤技師渡米して引取方交渉中なるが、年内には積送りの運びとなるべし。之に次で第二熔鑛爐(二百五十噸)及び第三熔鑛爐(五百噸)を準備する筈なり。同社は當年創立第一年より三ヶ年間を工事期間とする都合なりし處、鐵價暴騰の今日出來る丈け速かに作業開始すべしとて夫々敷地選定中なり。尙ほ此敷地(坂坪約卅萬坪)に關しては長崎、伊馬里、博多、唐津、岩船等の地方團體より、夫々緣故を辿りて猛烈なる運動開始され、其間情實纏綿する杯容易に決する處なかりしが、此程漸く折合付きたる模様なるを以て、同社の事業開始は案外迅速に行はるゝやも知るべからず。同社の株は現物にて目下拂込額見當の相場を唱へ居れるが、政府の特別保護あるが上に、開業迄毎期五分の配當保證あり、加之も前途洋々たる者あれば、此機會を利用して同社株を買置くは最も有利なるべし。

(88) ▲日本鋼鐵會社 同社は六年九月、資本金白萬圓(内拂込貳十五圓)を以て創立したるものなるが、製品は年額坩堝炭紙三百五十噸、坩堝特殊鋼五十噸、銑鐵三千五十噸、屑鐵七

十五噸を産出する筈にて、原鐵は島根縣邑智郡川本及び其近在十數ヶ町村に亘る砂鐵採取に依るべく、當初は主として銑鐵を製出し、漸次鋼材に及ぶ計畫あり。熱料は主として低廉なる木炭に依るべく、据付熔鑛爐は合計十一基にて、一ヶ月鐵塊生産能力は豫定千五百噸(一日平均五十噸)なり。今假りに一ヶ月一千噸の製産能力に過ぎずとしても、一噸の出産費六十圓内外に過ぎざれば、目下銑鐵市價一噸百三十圓は七十圓の利益なり。左すれば半期六千噸の銑鐵利益は四十二萬圓となる。此内より諸經費約二十萬圓を控除すれば優に半期間二十三萬圓の利益を計上し得べし。同社は來期(五月決算)に於て三千噸の銑鐵を製産し、十萬圓以上の利益を見る筈なりと云へば優に二割乃至二割五分の配當を爲し得べしと信せらる。同社株は目下拂込額見當を以て市場に賣買され居れるが、愈々製品を見るに至らば、二十四、五圓の市價を見るに至るべし。

▲富士製鋼會社 同社は去る九月資本金六百萬圓、内拂込百五十萬圓を徴して成立したるが、工場敷地は京濱間の海岸にて、總坪數三萬五千坪を買收し、目下工場建設の準備中なり。同社は第一期に鍛鋼品年額二千五百噸、鑄鋼品二千五百噸、合計五千噸

の製品を製出する豫定なるが、之が原料は支那、朝鮮、北海道及び内地の鐵鑛山を買收して自營策を執る筈にて、既に内地及び北海道に於て二、三鑛山の買收契約を成立したれど、採鑛に着手する迄は差當り屑鐵及び銑鐵を購入する筈なり。製鋼用として据付く可き熔鑛爐は十噸爐四基なるが、他の機械類は夫々注文済となりたれば、來る上半期中には全部据付を了し操業を見るに至るべく、該上半期中は利益を計上し得ず共、下半期よりは一、二割以上の配當を見る事は困難ならざるべし。同社株は一株十

一、二圓にて現物として取引せられ居るが、有利株として相當賣行きつゝあり。

▲東京銑鐵會社 同社は過般大倉喜八郎氏を創立委員長として株式募集中なりしが、既に資本金五十萬圓全額拂込済となりたるを以て、十一月中旬創立總會を開き會社成立を告げたり。同社の事業は北千住に於ける石川鏝之介氏の經營に係る、既設事業を繼續するものにて、特殊白銑鐵の製造を主とし、一日二十噸年額六千噸の製産を爲す筈なりと謂へば、白銑鐵といふ特色ある製品にして、市價亦た一噸二百一、三十圓の高價を唱へ居れば頗る有望なるべく、殊に現に相當の利益を擧げつゝあるものなれば、

来る上半期は引継利益と共に、二十萬圓以上を計上すべく、配當も年三割は容易なるべく觀せらる。

▲日本鑄鋼所 大阪を本社とする同所は、去る上半期に於て鑄鋼品の著しく高値に賣約されたる爲め、八萬一千四百餘圓の利益を計上したるが、今期は石炭、工賃、原料の暴騰にて利益割合に尠かりしも、而かも尙ほ約十二萬六千圓利益を計上せり。併し配當は前期同様な三割五分に決したり。來期も市價激變せざる限り、三割配當は容易なるべしと信ず。

▲其他の鐵鋼會社 右の外大阪に本社を有する東洋製鋼會社(今期配當一割)電氣製鐵會社(資本金五百萬圓、内百二十五萬圓拂込)中國製鐵會社、栗本鐵山會社、仙人山製鐵會社三木製鐵會社、山陽製鐵會社等あるが、調査未了に就き掲載せざるも、孰れも二、三割の好配當を爲したるは事實にして、如何に時局の影響に依り巨利を博し居るかを知らざるべし。(畢)

□一般放資物に就き完全なる調査出來致居候に付何時にても御相談被成下度候

□薄口錢にて確實御便利に御取扱申上候間多少に拘はらず御用命仰付被下度候

東京市日本橋區樫河岸廿五號地(千代田橋際)

### 力 要屋株式店

電話 浪花 圓五三〇三番  
振替口座 東京三七四七五  
發信略號(カナメ又ハ〇カ)  
變信登記(トウケイカナメ)

大正六年十二月廿五日 印刷

(非賣品)

大正七年一月一日 發行

東京市日本橋區楓河岸廿五號地

編輯兼 長谷部耕太郎

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

印刷人 新井由藏

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

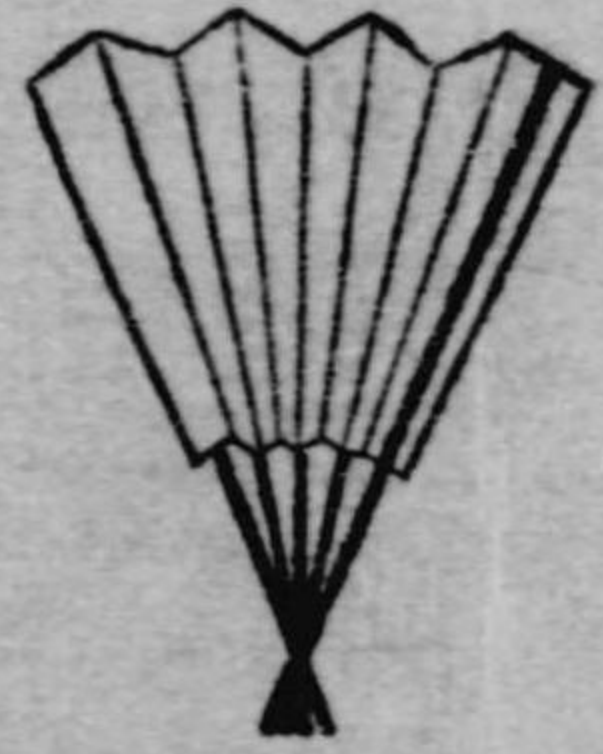
印刷所 新電堂

東京市日本橋區楓河岸廿五號地

發行所 要屋株式店



8. 6. 11



373  
97

終